

「今の日本はこのままでいいのだろうか」

# 武士道

BUSHIDO

第2号

平成20年12月1日



# 武士道憲章

- 一、武士道は志を尊ぶ  
〔立志〕
- 二、武士道は心の清明を希求する  
〔清明〕
- 三、武士道は公正にして信義を守る  
〔正義〕
- 四、武士道は自己陶冶に精励する  
〔修養〕
- 五、武士道は忠誠心を堅持する  
〔忠誠〕
- 六、武士道は剛直をもって旨とする  
〔剛勇〕
- 七、武士道は惻隱の情を心に蔵する  
〔仁愛〕
- 八、武士道は礼節を重んじ、恥を知る  
〔廉恥〕
- 九、武士道は時の流れを超越する  
〔超越〕
- 十、武士道は天地自然の理法と共に生きる  
〔自然〕

# 「責任をとる」ふらふら

武士道協会 副理事長

江口克彦 えぐちかつひこ



事を請け負い、その事を成し遂げることが出来なかった場合、あるいは、約束をしながら、その約束を果たせなかった場合など、そのときには、「責任をとる」ことが人には求められる。出来なかったから仕方ないでしょうというような態度は、人間の振舞いとしては許されるものではない。「責任をとる」というのが、人としての、きわめて重要な対応であろう。その「潔さ」が、逆にその人の評価を高くする。「命惜しむな、名こそ惜しめ」というが、「潔さ」が「武士道」のひとつといえるだろう。その「潔さ」の究極が、「切腹」ということになる。

しかし、このごろは、事を成し遂げなくとも、あるいは、約束を果たさなくとも、「責任をとる」というようなことが、あまり見られ

なくなつた。できれば、「責任逃れ」「自分とは関係ない」というような、無責任な人が増えてきた。最近も大阪の「三笠フーズ」という会社が、事故米の不正転売を五年以上も続け、各方面に食の不安を広げた。この三笠フーズへは、新聞によると、農水省は、この五年間に九十六回も立ち入り検査をしながら、その事実を見抜けなかったという。いったい九十六回も検査して、その不正を見抜けなかったとは、どのような次第なのか。明らかに、農水省の怠慢、なすべきことを成し遂げていない手抜き以外のなものでもない。にもかかわらず、白須俊朗事務次官は、記者会見で「私どもに責任があると今の段階では考えているわけではない」と発言した。まったく呆れるばかり、責任感のひとかけらも感じられない。

い。これが、日本の官僚の典型である。つねに責任逃れ、責任転嫁、失敗は官僚の辞書にはない、というような傲岸不遜の態度、発言は、とても毅然とした潔い武士とはいえない。さすがに福田首相（当時）も怒り心頭、怒髪天に発して、ついにこの事務次官をクビにした。事務次官といえは、官僚の頂点の人である。その人がこのていたらしく、「武士の風上にもおけない」とはこのことだろう。いやな世の中になつたものだ。

江戸時代後期の国学者であり、歌人・読本作家であった上田秋成は、その著作『雨月物語』のなかに、「菊花のちぎり」という物語を入れてい。播磨の国の加古というところに、丈部左門という人が住んでいた。学問が好きで、仕官もしないから、貧乏な暮らしを母と

ともにしていた。ある日、気分転換にと、左門は外に出掛けた。ある家に立ち寄り、主と話をしていると、どこからか苦しみをこらえるうめき声が聞こえてくる。主に尋ねると、

三日まえに、一夜の宿を貸してほしいと、一人の見知らぬ旅の武士が、訪ねてきた。夜も遅く、気の毒にと思った主は、その武士を泊めたのだが、その晩からひどい熱が出て、今日まで三日間苦しんでいるという。そこで、左門は主が止めるのも構わず、その苦しんでいる武士の寝ているところにいき、いろいろと介抱するだけでなく、それから一日も欠かさず、看病に通う。旅の武士はたいへん感激して、左門の前に手をつき、丁寧に頭を下げて、札を述べ、自分の身の上を話し出す。名前は、赤穴宗右衛門。富田の人。主人の使者として近江の国まで出掛けている最中に、国もとで一大事が起こり、急遽富田の国に帰る途中で、思いもよらぬ病気に取り付かれ、こうして、あなたのお世話になってしまった。どんなご恩報じをしたらいいのでしょうかと言う。そのうち、意気投合して二人は義兄弟になろうとまで約束するほどの仲になった。やがて回復した宗右衛門は、国に帰ることに

なる。そのとき二人は九月九日にまた会いましょう、また帰ってきます、という約束をする。

さて、九月九日。左門は待っているが、なかなか宗右衛門は来ない。ついに夜になってもこない。一度床に入ったが、寝付かれず、起きて、門を開けて外に出てみた。と、薄暗い軒下に、宗右衛門が立っているではないか。早速、家の中に招き入れ、食事を出す。宗右衛門は手もつけず、ものも言わない。しばらくして、ようやく宗右衛門が話し出す。「実は自分はこの世の者ではない」と言う。国もとにもどり、トラブルがあつて、城中に監禁されてしまった。しかし、どうしてもあなたとの約束を果たさなければと思い、死ねば、その魂は一日で千里でも万里でも行くことが出来るといふことを思い出した。そこで、富田城の座敷牢の中で切腹し、夜風に乗って、菊花のちかいに間に合わせたという。「この心を哀れとってください」

この話は、ときおり、いろいろな書物の中で引用されているから、ご存じの方も多だろう。なぜ、引用されるのか。この死んでまで約束を果たした宗右衛門の、その責任のと

り方に「武士の美学」を多くの人が感じるからではないかと思う。むろん、約束が果たせなかったから、あるいは、なすべきことがなせなかったから、死ぬべしということではないが、少なくとも、そのときの責任のとり方は、それなりに考えなければならぬのではないだろうか。私たちは人間として美しくありたい。私たちは改めてこの責任をとるという「武士の美学」を身につけるべきではないか、とくに指導者の立場の人は肝に銘ずべきではないかと思うが、いかがなものであろうか。

#### ●プロフィール

#### PHP総合研究所代表取締役社長

1940年、愛知県生まれ。慶應義塾大学法学部政治学科卒。松下電器産業株式会社(現パナソニック株式会社)入社後、1967年、PHP総合研究所秘書室長、取締役、常務取締役を経て、1982年、専務取締役。1994年、副社長。2004年、社長に就任。松下幸之助のもとで23年間、直接指導を受ける。内閣官房道州制ビジョン懇談会座長、公務員制度の総合的な改革に関する懇談会委員、内閣府沖繩新世代経営者塾塾長なども務める。著書に『地域主権型道州制』『脱「中央集権」国家論』『経営者の教科書』『いい人生の生き方』など多数。

# 武士道精神と出処進退

武士道協会 専務理事

おのしんや  
小野晋也



九月、福田総理が辞任した。昨年九月二十六日に、第九十一代内閣総理大臣に就任して以来、約一年間の在任期間ということになる。

激動の時代、しかも、衆参ねじれ現象と呼ばれる議会対策の困難な状況において、この一

年間の仕事は、かつての十年間にも相当したのではないかと私は思う。常に状況を客観的な目で誤りなく把握判断し、更に多くの人に気配りをしつつ、それを着実に実行に移すという政治は大変であったと思う。心からの敬意を捧げたい。

ところで、今稿で取り上げたいと思うのは、「出処進退」の問題である。

安岡正篤氏の『照心語録』の中に、こんな言葉群がある。

●人間は根本的に道徳に立たなければ己を把

握することはできない。必ず利害や欲望に左右されて己を失ってしまうからだ。窮道は命ではあるが、道徳に立つことよってのみ、窮道に左右されずに自己を活かすことができる。

●孟子に独善兼善論がある。独善といえは、現在は自分さえよければよいという悪い意味に使うが、孟子のいわゆる独善は自己に社会を改良する力が無い時にはせめて自分を善くするということ意味だ。幸いに社会を感化する力があれば、自分だけでなく兼ねて天下を善くする。これを兼善という。

●この独善兼善から出処進退論が出てくる。出処進退は本来その人自身を決する非常に難しい問題だが、現代人にはその言葉さえ失わ

れつつある。人間の墮落という他はない。

少し長い引用となったが、これは要するに、自分が利害や欲望に惑わされることなく、自らの道徳心に立って判断して、社会・天下を善くすることが出来る力を持つと思われる時は、その職に就きその仕事に力を尽くすが、力をふるう環境が失われ、もうその立場に留まるべきではないと考えた時は、潔くその職を去れと教えているのである。

私は、福田総理の退陣表明の記者会見の様子を見ながら、この言葉が胸をよぎった。総理が辞職を決断した理由は、決して、自らの利害に基づくものではなかったと思う。また、名誉心等の欲望でもなかったと思う。ただ、世を善くするに自らが相応しいか否かという一点に、その思いが凝縮されていると思った。



立派な出処進退であったと思う。

それにつけても、マスコミの報道ぶりは、軽薄にも、途中で投げ出す無責任さを批判するものと、政党次元での利害得失を論じるものばかりであった。総理の潔い心中を慮るものがほとんど何も無い姿に、とてもやるせない気持ちになった。

しかし、これが現実である。マスコミの報道姿勢には勿論問題があるが、同時に、日本社会全体がこんなレベルでしか物事を判断出来ない社会になってしまっているということ、ことが情けない。人間の生命を、物理的現象としてしか捉えられず、判断基準を利害得失にしか求められない社会で、これからの日本は大丈夫なのだろうか、不安な気持ちにもなった。

この出処進退は、人間の生死にも関係する。弟子である高杉晋作から「自分はどうか死ねばいいのか」と問われた吉田松陰は、獄中から晋作にこんな手紙を送る。「この死に大義があるなら、進んで死地に赴け。しかし、それが犬死にだとなれば、どんなにしても生きよ（大意）」と。

見事な出処進退の言葉である。そして、こ

れが武士道精神の粹である。近頃の日本が、軽佻浮薄な世相となってきたのは、この社会の中から、この武士道精神が失われてきているせいかも知れないと思う。

◆ 今回のこの一文には、恐らく読者の中にも賛否両論があるだろう。ギリギリの状況における二者択一問題には、客観的に正しい一つの答えなどあるはずがないと私は思う。最後は、その人の思想であり、信念がその決断を支えるのである。そして、それが利でなく義に発しているか否かが、その決断の真の価値を示すのだと思う。

私自身、少し前に次期総選挙に出馬をしないという大きな決断を行った。この決断を支えたのは、まさに私が胸に抱く思想であり、具体的には武士道精神であったのである。

#### ●プロフィール 衆議院議員

1955年、愛媛県生まれ。東京大学工学系大学院航空学専修修士課程修了後、松下政経塾の第1期生として入塾。その後、1983年、27歳で愛媛県議会議員となり、1993年、38歳で衆議院議員初当選。現在5期目。

経済企画総括政務次官、自民党文部科学部会長、文部科学副大臣、自民党宇宙開発特別委員長、衆議院財務金融委員長、自民党四国地方開発委員長、自民党政策審議委員、自民党中央政治大学院長等を歴任。現在は、衆議院環境委員会理事などを務める。

また、1984年より、国民に対する啓蒙と新しい文明創出を主目的とする「OAK・TREE運動」を興して、それを主宰。2008年9月に、次期衆議院総選挙に出馬しないことを表明し、今後は「在野の政治家」として、地方から日本の国を救う活動に取り組むこととしている。



# それぞれの『武士道論』

## 「武士道と京都(2) 縦軸と横軸」

武士道協会 理事

かどかわだいさく  
門川大作



私は、「まちづくり」「ひとづくり」と教育は一体だと思う。感性豊かな人々によって、美しいまち、風格ある京都をつくっていくことは、美しい日本、美しい地球に繋がる。

「縦軸」としての「伝統・歴史・文化」、個人・家庭でいえば「先祖を敬い、子孫を想う」という永遠に繋がっていく「縦軸」を大切にしたい。今の時代に生きる我々が自分たちの世代のことだけを考えるのではなく、連綿と積み上げられてきた歴史と伝統の中で、「日本に、世界に京都があつて良かった」と、世界の人々に実感していただけるよう、「縦軸」をしつかり守りつつ創造していく。

同時に、「横軸」として、家族、地域のコミユニティ、人と人との繋がり、つまり心と心の繋がりが大切。「横軸」があつて初めて、地域から日本、世界へと広がっていく。

こういう視点に立てば、自然との共生や教

育、食文化・食育、さらに、縦にも横にも繋がって生かされ、生きている命をきつちりと認識できる。

「時の流れを超越する」(武士道憲章・九)、「惻隱の情を心に蔵する」(同七) 武士道は、このことを理屈ではなく、心と体の合一の中で、体現し、受け継ぎ、磨き上げてきた。

前回ご紹介した京都武徳殿での世界武徳祭で、六百名をこえる世界からの武道家を前に、自然に「私の背筋が伸びた」のは、時の流れを超越した「縦軸」の力と、世界に通じる「普遍性」を持った「横軸」の力が一人ひとりから発せられ、凝縮し、伝わってきたからであろう。

私は、市民と共に感じあい、共に汗をかく「共感」と「共汗」を市政運営の基本にしている。格差が大きな社会問題となり、環境破壊や争いが地球上で絶えない今、世界の人々が、

「共感」と「共汗」で「縦と横」に心を繋ぐ、そんな世界の実現を念願し、京都から市民ぐるみで発信を続けたい。



### ●プロフィール

#### 京都市長

1950年生まれ。1974年立命館大学二部法学部卒業。1996年、京都市教育委員会総務部長。1999年、教育次長。2001年、教育長。2008年、第26代京都市長に就任。文部科学省中央教育審議会各部会委員、内閣「教育再生会議」委員他、多数の要職を務める。

# 日本精神の根本である…… 武士道について

武士道協会 常務理事

津田佐兵衛



日本の最大の危機は江戸時代の末期に訪れました。当時、鎖国をしていた日本に、世界の大国は武力で日本を植民地にするか、属国にしようとむらがつてきました。公武一体の挙国一致体制はなく、国内は倒幕の内乱が起こるかも知れない混乱状態でしたが、この危機を救ったのは武士道を中心とする日本精神でありました。

日本を訪れた諸外国の使節は優位な武力を持ちながら、日本の政府ではなく、一人ひとりの日本人の忠誠心と、勇猛心と、そして礼儀正しい生活態度を見て、力で攻めることを控えて、紳士的な外交、取引を申し入れてきたのです。諸外国の政府は派遣した使節の手ぬるいことを攻めました、日本を訪れた使節からの、日本の国情に大変感心をして、このような立派な国と国民は見たこともない……という報告で、平和な外交取引を選択したのです。

さて、時代は変わって大東亜戦争に負けた日本は、平和産業としての科学や工学は立派に引継がれ、経済的には世界でも認められた国になりましたが、最も大切な日本精神を教育して次世代に伝

えることが出来ませんでした。この日本精神の根本にあるのが武士道であり、戦後の独立を獲得した日本は、まず精神教育によって日本人の品格を取り戻すべきでありました。私どもは力を併せて、市場原理主義に汚染された日本を洗い清めて、世の人々から尊敬される国に戻したいという願いが、この武士道協会の目的であって欲しいと思っています。

武士道とは何かということは学問的に学ぶことは大変難しい問題です。四百年に余る日本の社会規範として、人から人へと伝えられ磨きあげられた人生訓でありますので、私には簡単に理解出来ないことが多いのです。皆様の中には私と同じように何から学ぶのか、戸惑われる方も多いと思います。そこで全く歴史の初歩的な資料として私のどっつたルーツをご紹介します。

まず、武士道の教えを説かれたのは沢庵禅師（一五七三年生まれ『不動智神妙録』）から柳生宗矩（一五七一年生まれ『兵法家伝書』）ではないかと思えます。宮本武蔵（一五八四年生まれ『五輪書』）はほぼ同年代に同じ不動心を悟っておられま

した。山鹿素行（一六二二年生まれ『山鹿語類』）は士道を提唱されました。これは武士道に政治的な徳性を求められるものであります。同じ時代に関ヶ原の合戦その他に勇名をとどろかせた鈴木正三（一五七九年生まれ『反故集』『万民徳用』）は四十二才で出家して仏道武士道の思想を説きました。

その後、山本常朝（一六五九年生まれ『葉隠』）は武士道の奉公の心得を書き残しました。また、本居宣長（一七三〇年生まれ『玉勝間』）は武士道こそ、大和魂である、儒教で教える天道は武士道に通じると述べ、軽率に蘭学に走ることを戒めています。佐久間象山（一八一一年生まれ『省けん録』）、吉田松陰（一八三〇年生まれ『大和魂』）等は武士道をもって大和魂とし、日本精神の高揚に貢献しました。

その後、内村鑑三（一八六一一年生まれ）、新渡戸稲造（一八六二年生まれ）、李登輝（一九二三年生まれ）等の方々が現代に武士道を解説し、武士道学が現代の歴史学者の中にも再生されつつあります。永い歴史を経た武士道のこれからの夜明けを応援してください。

## ●プロフィール

### 井筒ハッ橋本舗(株) 取締役名誉会長

1923年京都生まれ。京都帝国大学(現京都大学)農学部農林生物学科卒業。1983年、第6代佐兵衛を襲名。1994年、井筒ハッ橋本舗(株)代表取締役社長に就任。2008年、同取締役名誉会長に就任、現在に至る。現在、京都名産品協同組合理事長はじめ数々の要職を務める。



# 武士道の源泉「神道・儒教・仏教」から武士道を見る

## 塚原ト伝の生き方

### にみる武士道

武士道協会 理事  
矢作幸雄



#### ◆神道と武士道

塚原ト伝は、延徳元年（一四八九）二月に、鹿島神宮の社家ト部吉川家の二男として生まれ、幼時に塚原城主塚原安幹の養子となった。

実父からは鹿島の太刀を、養父からは香取神道流を学んで、十六歳から十五年にわたって第一回の廻国修行を行った。

当時の京の都は応仁の大乱から三十六年の殺伐とした時代で、ト伝は十七歳で清水寺近くで真剣勝負に勝ち、以来多くの戦場に出て戦い、或は真剣勝負を重ねて無敵の強さを得たが、やがて心を病んで鹿島へ帰ってきた。

幽鬼のような顔を見て、実父、養父が当時の鹿

島の剣の指導者松本備前守に托し、備前守は鹿島神宮に一千日の参籠を奨めた。この参籠修行はト伝を立直らせ、生家ト部の剣を伝える意味でト伝と号し、悟りをひらいて「一之太刀」三段を完成させた。

折しも鹿島城では内乱が必至となり、備前守は自身の死を覚悟して、ト伝に第二回の廻国修行に赴くことを強いた。

ト伝は、この第二回の廻国では九州まで足を延ばしているが、剣の完成を目指して自己を高めると同時に、木剣を二本携えて、多くの弟子に指導を行った。第一回の廻国の折には、戦場に出たとはいえ、多くの人を殺めたが、二回目はずかしく、世に仇する者を斬ったのみである。

やがて九年ほどで帰国し、塚原城の城主となり多くの弟子を育て、十年共に暮らした妻の死後、養子彦四郎幹重に城主の地位を譲り、六十八歳にして第三回の廻国に出発した。

ト伝の剣名は高く、將軍足利義輝、義昭、細川藤孝などに教え、伊勢の国へ入って国司北畠具教には「一之太刀」を授けた。

当時は武芸者にも受領名が流行し、松本備前守、

塚原土佐守、飯篠伊賀守、上泉伊勢守、その他多くが守号を持った。これは、昔赴任した地方の守護ということであったが、やがて名目のみの守号となつて、見も知らぬ遠方の名を受領した。塚原ト伝は幾度か奨められたに違いないが、虚名を好まず、塚原ト伝、もしくはト伝入道のみで通した。

『甲陽軍鑑』に、「大鷹三羽、乗り換馬三頭、上下八十人ばかり召し連れ」とあるけれど、ト伝自身は派手なことを好まず、第三回の廻国の折に、はじめて弟子二人を伴ったかと思われる。従つて、『甲陽軍鑑』の記事が正しいならば、それは武田信玄が滞在の一刻、ト伝を遇した姿に外ならないのである。

五百余年の昔、塚原ト伝は己に厳しく、すでに自身の武士道を完成させていたに違いない。

#### ●プロフィール 元・筑波山神社権宮司

1934年、茨城県生まれ。国学院大学に学び、1961年、大洗磯神前神社権禰宜。鹿島神宮禰宜、筑波山神社権宮司等を歴任。神社本庁教誨師として、1983年より水戸少年刑務所に6年、茨城農芸学院に20年、収容青少年の相談指導にあたる。1992年と1998年に、筑波大学大学院非常勤講師をつとめる。歴史考房回帰洞を主宰。鹿島神宮教学顧問、鹿島新当流彰古会顧問、鹿島神流武道連盟顧問。著書に『ともしび』（1962年にNHKテレビドラマ放映）、『やまとたけるのみこと』『にっぽんぼんざい』『古代筑波の謎』など多数。

# 武士道精神に おける敬と恥

武士道協会 理事

安岡正泰 やすおかまさやす



## ◆儒教と武士道

『論語』に、

「犬馬に至るまで、皆能く養うことあり、敬せずんば何を以て別たんや」とあります。

人間が動物と基本的に違うところは、ただ「愛」だけでなく「敬する」という心を持っていることです。敬する心とは、人は親子であれ、夫婦であれ、先輩・友人であれ、また、先祖や偉人であれ、少しでも自分より優れた人物に近づこうという心があるということです。

また、『孟子』に、

「人は以て恥なかるべからず。恥ずるなきをこれ恥ずれば、恥することなし」とあります。

人間は、羞恥心がなければならぬ。もし、羞

恥心がないことを恥ずかしく思うようになれば、辱められることはないという意味です。

敬と恥は、『論語』『孟子』が説く儒教の根本思想です。

敬することは、同時に自ら反省して自分の未熟さを恥じて、少しでも向上しようと努力することです。武士道精神の根本も同じようにここにあると思います。そして、これは現在の政治家道、官僚道、経営者道も同じでしょう。また、最近、国技相撲界にもいろいろな問題が起きましたが、相撲道としてみれば残念ですが、この敬と恥をないがしろにしたことにあると思います。我々も十分に反省すべきです。

ところで、武士の別称に「侍」という呼び方があります。

「侍」とは、辞書を引くと平安中期以降貴人に仕える武士のことで、後に武士の総称になったとあります。もともと、「侍」は、侍べる、侍するというところで、尊敬する人の側について務めたいという意味で、日本独特の言葉だと思えます。未熟な自分を恥じながら仕えていこうという道が武士道であり、その道を実践して生きようとした人が武士、侍であったといえます。

話は変わりますが、手紙のあて名の左下にそえて、「御侍史」、「侍史」と書きます。目上の人、

尊敬する人に敬意を表すことです。

こういう手紙をいただきますと、何かその方の心の奥ゆかしさを感じます。

武士道協会の憲章の中に、「武士道は礼節を重んじ、恥を知る」とありますが、正にこれは、「敬の心」、「恥じる心」と同義であるといえます。この二つの心を日常行動の規範として実践することが今、我々日本人に求められている大きな課題といえるでしょう。



### ●プロフィール

#### (財)郷学研修所 安岡正篤記念館理事長

1931年、東京都生まれ。1956年、早稲田大学第一法学部を卒業、日本通運株式会社入社。1989年、同社取締役(総務、人事、労務部門担当)に就任。1991年、常務取締役、1993年、常務取締役中部支店長を経て1995年、退任、関係団体役員を経て、1999年、財団法人郷学研修所安岡正篤記念館理事長に就任、現在に至る。著書に『為政三部書に学ぶ』(致知出版)など多数。

# 「弓と禅」

物の興廢は必ず人に由る

田中成明

たなかじょうみょう



## ◆仏教と武士道

南ドイツの黒い森にある「トズモース精神文化研究所」では、デュルカウム所長を中心に、多くの哲学者が座禅を修している。このドイツに禅や武道が広まったのは、鈴木大拙師の膨大な著書と弟子丸泰仙老師の伝道である。しかし、オイゲン・ヘリゲル博士の存在は大きい。

ヘリゲル博士（一八八四〜一九五五）は一九二二年から二九年まで、東北帝国大学で哲学と古典語（ギリシャ、ラテン、ヘブライ語）を担当された。新カント学派（特にハイデルベルヒ学派）の代表者である博士は、日本のもつとも日本的なるものを求めて弓道と出逢う。河波研造範士の下に弟子入りした博士は、五年半の修道の結果五段の免許を受けた。

博士は小銃射撃の経験から、弓道もスポーツの

一種、或はたくみに矢を的にあてるための合理的な技術であると考えていた。その思いは稽古の初日からくつがえされた。

一、筋肉を使わずに弓を引くこと。二、呼吸法による精神集中。三、矢を放つには、これを放とうという意志を全くもたない自然の放れ。四、的を見ないで的を射る、絶対無の境地になる。

これは、禅の修道に似ている。この体験録が『弓道における禅へ弓と禅』（一九四八年刊）に結実した。この著書こそ欧米人の参禅の入門書になっている。

私が渡米した一九七八年頃、コロロド州ボルダールの田舎町には、西藏僧のトゥルンパ・リンポツェ師が創立した『ナロッパ研究所』があった。そこでは、日本文化へ書道・華道・茶道の他に弓道が、京都出身のKANJURO柴田二十世範士によって指導されていた。

八十年代の初めから柴田範士の弟子として指導を受けた医師（マティユ氏）も、大学時代にサンフランシスコ禅センターの鈴木俊隆老師に参禅。その後、トゥルンパ・リンポツェ師を経て真言宗を指導する私の弟子となった。このような求道者は欧米人の中でも特別かもしれないが、仏教に興味をもち、人生生活の中でわびさびの心を究明しようと日々鍛錬している人は増えつつある。

武道を稽古する欧米人の間に、これからますます仏教思想が取り入れられ、西洋思想との融合が生まれる。さすれば、二十一世紀の現代、世界中に蔓延している心の荒廢を救うことになる。

「物の興廢は必ず人に由る、人の昇沈は定めて道に在り」（空海）



### ●プロフィール

#### アメリカ大日寺住職・国際マンダラ協会会長

1947年、埼玉県生まれ。1968年、東京金剛寺（高幡不動尊）にて出家得度。1970年、京都大覚寺伝灯学院卒。1970年、国際仏教興隆協会よりインドに派遣される。1975年3月帰国。1975～1978年薬師寺で説法。1978～2000年まで欧米人に仏教を伝道。2001年に帰国。早稲田大学オープンカレッジ講師。著書に「ニューヨーク曼荼羅」「神通力」「親孝行」など多数。

# 使命感を大きな支えに （ 武士道と共に生きる ）

武士道協会 理事  
かぎやま ひでさぶろう  
鍵山秀三郎



武士道を身につけると、苦難に遭遇した時に上手に乗り越える方法を身につけることができます。

幸せだと感じるのも全て気持ち次第です。同じ事でもその時の気持ちによって幸せに感じる時と、感じない時があるでしょう。苦難も同じです。

苦難をどのような気持ちで受け止めるかによって、不幸にも感じれば、成長の糧だからありがたいと感じることもできるのです。受け止め方次第でそれから先の人生が大きく違ってまいります。

そこで、今回は、苦難を乗り越えるために必要な武士道を、私の経験からお伝えすることにしましょう。

「苦難に耐える」というふうに構えると、つい自分ひとりだけの孤独な世界に陥りやすいものです。孤独になると自分が惨めになるだけです。

孤独感に陥らず苦難に耐えるには、「親にだけは心配をかけたくない」とか「苦難は私ひとりが背負っていく」という強い使命感を自分自身に言い聞かせることです。その使命感が、耐える大きな支えになります。

いまも楽しくて、将来もずっと楽しいという歴史はありません。楽しいあとには苦しみがあり、苦しいあとには楽しみが待っているものです。繰り返すのが苦楽でもあります。

現代の日本のように、ラクして楽しいことばかりを追い求めているようでは、将来、悪くなるばかりです。苦しいことを先にして、楽しいことはあとに延ばす。先憂後楽。大切な心構えです。

どん底の生活をしておりますと、とかく人間は卑屈になります。

私もかつて、いやというほどどん底生活を味わいました。その日の食事も事欠き、食うや食わずの生活をしたこともあります。

そんな私が、卑屈にならずに済んだのは、志のおかげでした。

つまり「理想の会社を創る」という使命感が、私を支えてくれました。

## ●プロフィール (株)イエローハット取締役相談役

1933年、東京生まれ。1952年、疎開先の岐阜県立東濃高校卒業。1953年、デトロイト商会入社。1961年、ローヤルを創業し社長に就任。1997年、社名をイエローハットに変更。1998年、同社取締役相談役となる。創業以来続けている「掃除」に多くの人が共鳴し、近年は掃除運動が内外に広がっている。「日本を美しくする会」相談役。著書に『凡事徹底』『鍵山秀三郎語録』『小さな実践の一步から』など多数。

# 「学校教育と 武士道精神」

【第二回】

武士道協会 理事

うへた ひろかず  
植田宏和



大分県教育委員会の現職教育審議監の逮捕という、前代未聞の事件へと発展した教員採用試験にかかる不正が、大きな社会問題となっている。また、教職員の飲酒運転やわいせつ行為等による処分が年間四千件を超える実態があり、教職員の地位は地に落ちつつある。聖職者と呼ばれ、自らを律し、教育に全てを懸けるといふ教師像が見えなくなっている。戦後多くの教職員が自らを労働者と捉えサラリーマン化し、自らの給与や勤務条件の向上を目指すことが子供たちへの教育よりもウエイトを占めてしまったことが、大きな要因の一つであると考えられる。

武士道において、金銭での交渉ごとは最低の行いとされてきたし、仕事に対価を求めないことは公務に関わる武士のプライドであった。「武士に二言はない」。この言葉は、武士という特権階級の者が自らの誇りをかけ、「嘘やごまかしをせず、約束事は証文なしで守らねばならない」ということの証であり、お互いに信頼関係が成り立っていたことの表れである。教師も人であり聖人君子ではなく、様々な理由で失敗もすれば約束を守れないこともある。しかし、絶対してはならない失敗や必ず守らなければならない約

束がある。絶対してはならないことの一つが、今回の大分県の教職員汚職である。子供たちに「誠実・公正公平・正義」等の価値を教えている教育者が、守らなければならない約束（ルール）を破り、子供たちの心を傷つけたことが大きな問題である。「義を見てせざるは勇なきなり」正しい行いには勇気が必要であるが、それを教える教師自身がそうあらねばならない。

指導力不足教員や問題教員が、マスクミで大きく取り上げられ、教師に対する信頼が低下していることが、モンスターペアレントの出現にも影響している。また、国も教職調整額（教職員には残業手当がつかないが、月に八時間分の残業があると見なし、四％を調整額として給与に反映させている）を勤務時間外手当として支給する案を進めようとしている。しかし、教職員の勤務は、部活動や生徒指導、緊急の家庭訪問や地域・保護者対応、そして、教材研究等特殊な場合が多く、家庭での仕事を余儀なくされるものもあり、残業の規定が難しい。その特殊性を考え、残業手当をつけず教職調整額としてきたのである。しかし、ここでも指導力不足教員や問題教員の出現等によって、国と教師との信頼関係が薄れていると感じる。

今こそ、教師自身が自らを律し、職責を全うすることにより、教師に対する信頼を取り戻さなければならぬ。

## ●プロフィール 全日本教職員連盟委員長

1960年、徳島県生まれ。鳴門教育大学大学院学校教育研究科修了。徳島県公立学校教員、全日本教職員連盟事務局次長、事務局長、副委員長を経て、全日本教職員連盟委員長に就任。現在に至る。

# 武士道と社員研修

武士道協会 常務理事・事務局長

ほんだももよ  
本多百代

## なぜ今、日本型 人材育成か



なぜ今、日本型人材管理が海外から注目をあびているのでしょうか？

以前私が勤めた日本の大手企業の人材管理システムは、完全に欧米型でした。人材管理はコンピュータで徹底し残業は一分ごとにつきました。トイレに行く時間も休憩という名目でコンピュータに記録されますから、トイレに行くにもダッシュで、しまいは行くことを我慢するようになりました。また、勤務時間と実働時間の比率を計算し、営業成績を加味して成績を出して順位を公表していました。

日を重ねるに従い、私の気持ちは畏縮し、強制感と恐怖感に覆われ、仕事に向かう自発性と意欲が減退しました。ため息が多くなり気持ちが荒み、やる気も起きなくなりました。その前に勤務していた大手信託銀行の事務は、三十分経過しなければ残業がつかず、終業が二十分間長引いたりすると損をした気分になりました。しかし、欧米型管理を味わった私は、残業などつかなくてもいいから、トイレは時間を気にせずゆっくり行きたいと思うようになりました。給料には響かないのですが、トイレ時間まで評価

対象になるのは耐えられないと思っただけです。

会社側は、機械管理の方が人件費の無駄がなく管理も徹底できて楽だと思ってしまう。しかし、それについてくる従業員はお金のために仕事をしていたり、何も考えないで指示命令に従うだけの人が多いことも事実です。意欲的で自発的に仕事をする人は、数字以外に自分の存在を認めない欧米型ですと、自分で自分を追い込んで息苦しくしてしまうのです。反対に日本型人材管理では、休憩時間として計算されない三時のおやつタイムが暗黙で設けられています。十分ほど頂いたサービス休憩にお茶を入れてみんなでおやつを食べておしゃべりする。これが気分転換になり夕方の一息疲れる時間帯に仕事の効率を上げる役割を果たしているのです。このように一見無駄なことが効率を上げる役割を果たしているのが日本型人材管理なのです。

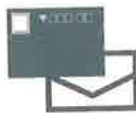
日本型人材管理には武士道が活かされています。武士道は意欲的に澁刺と、生きがいとして仕事をする心を育てる役割を果たしています。

### ●プロフィール

#### (有)LineAge(ラインエイジ)代表取締役

武士道を取り入れた人材育成・社員教育を提案実施。講演講師、社員研修講師、就活セミナー講師、大学ゲスト講師などを務める。

中日新聞社の中日研修センターで、組織開発と人材育成にたずさわる。また、組織を活性させる方法を見つけるため、自ら16社11業種でパートとして働き、社員の意欲について研究を重ね、武士道による育成方法を見つけた。著書に『これで完璧人材育成白書』がある。



### 「心と力のみなもと」～母の背を見て学んだ武士道精神～ 会員 岡本和徳

私の母は、真に母として子育てのために、母の人生のすべてを費やしてくれた人でした。

母は私が小学生のころから朝から夜まで働き詰めで、私たち4人の子供を育ててくれました。朝は4時から仕事へ出かけ、7時になると朝食、弁当の準備のために帰宅してくれました。その後定食屋、保険外交員、居酒屋などの仕事をこなし、もちろん夕食も作ってくれました。そして毎日眠ることのできる時間は3、4時間だけという生活でした。それもこれも子供たちを育てるためでした。そんな母から私たちは「愛」と「敬」の両方を学び、子供ながらも「母が私たちのために命をかけてくれている」と感じる事ができたのです。

私の母が私に「愛している」というような言葉をかけてくれた記憶は薄く、流行のおもちゃを買って与えてくれたことはありません。しかし苦しい生活ながらも笑い声の多い家庭で、物心ともにそれなりに満たされていたように思えます。物だけではなく、心も、ともに満たされていると、それなりにも幸せであるという感覚、自覚が芽生え、「人間はどのようにあるべきか」といった、少し人間的に深いところにも考えが及ぶようになるそうです。

簡単に親が子を殺害することができるようになった今の日本人は、人の気持ちを理解し、人のために考え、人のために行動するということができなくなってきたようです。日本は経済的には裕福になりましたが、「人間として」そして「日本人として」大切な何かを失ってきているということは、いまや多くの日本人が感じているのではないのでしょうか。

日本の子供たちは物質的なものには満たされています。しかし日本の子供たちは親からの薄っぺらい言葉やおもちゃではなく、親からの「心」や「行為」に飢えているのではないのでしょうか。忙しいからといってテーブルの上に500円玉を置いて、夕食代にするようにと伝えていませんか？ 子供に尊敬されるような行いをしていますか？ 社会の責任だといえばそれまでです。道徳が失われ、よき精神がますます失われつつある日本において、そのような精神を取り戻す必要があるのであれば、まずは自分の家庭から見直し、一人ひとりが「猶興の士」となって始めなければならないのではないのでしょうか。それが日本を良い方向に持っていく最大の力ではないのでしょうか。



### 私と「武士道」

会員 竹下健一

戦後日本は、平和・自由・民主主義の名の下に、文化・歴史・家庭など人生にとって最も大事な問題を置き忘れてきたようだ。

そのような観点からわが国の現状を見てみると、国に対する誇りは失われ、国民の道義が退廃した。そんな中で青少年を含めた凶悪犯罪は激増、国家や社会等、公に対する奉仕の責任や心構えが欠落し、しかも自意識過剰から弱者に対する憐憫の情すらもない者が増え、本来なら手を差し伸べるべき人たちからも金品を奪い取る輩がいる。

もっと恐ろしいのは池袋や秋葉原事件のように「他人の生命」を何の理由もなく簡単に奪ってしまう者がいるという事実である。

日本には古来より「道」という考え方があり、自分から切り開いていく道、その道の先には人々の安寧秩序があるという広範な精神の世界がある。それが、日本民族の精神・文化・芸術を支えてきたものと私は考える。道の中で安寧秩序を考える時、「武士道」という士の魂を想起しなくてはならない。

今日、山積する幾多の難問の根底には、わが日本民族が培ってきた「武士道」精神の欠落、または瓦解があるのではないかと。

今こそ、この厳しい現実と正面から向き合い、連綿と続くわが国の歴史の中から教訓となるべき教えを紐解いて、現在の日本に適合した「武士道」を創造することが、平和な日本を築く原動力となるのではないかと私は考える。

ご案内

# 武士道



これまで、開催いたしました勉強会、講演会、シンポジウムの模様をDVDで撮影・編集しております。それぞれ、ご参加者には大変高い評価を頂戴しております。ご参加いただけなかったみなさまも、ぜひご自宅でご覧頂きたいと思っております。

ご希望の場合は、事務局までご連絡ください。

## 勉強会・講演会をDVDで!!

第1回勉強会:講師 小野専務理事  
コメント:鍵山理事・植田理事

第2回勉強会:講師 小野専務理事  
吉田松陰について

第3回勉強会:講師 小野専務理事  
コメント:JICA成瀬猛様

各DVD全1枚 会員頒布価格:1,000円(録画時間:約2時間)

第1回講演会:講師 塩川理事長・矢作理事・安岡理事・田中成明様

第2回講演会:講師 江口副理事長・高山直様(EQジャパン社長)・  
(千葉真一改め)JJサニー千葉様・門川理事

各DVD全1枚 会員頒布価格:2,000円(録画時間:約4時間)

※いずれも、当日配布いたしました資料を添えてお届けします。

## 会員募集キャンペーン

ただいま、会員募集のキャンペーンを行っております。ぜひ、あなたも当協会の仲間に加わりませんか。そして一緒に明るい社会づくりを目指しませんか。私どもの活動を少しでも影響力あるものにしていくためには、多くの人と力を合わせていくことが不可欠です。すでにご入会いただいている会員の皆様には、仲間の輪をもっともっと広げていくために、ぜひお一人一名の会員紹介をお願いいたします。ご紹介いただくための案内パンフレットをご用意いたしておりますので、事務局までご連絡ください。よろしくお祈りいたします。

### 【投稿募集】あなたの武士道に関するご意見を事務局までお寄せください。

- 字数:250字程度
- 住所・氏名(ふりがな)・年齢・職業・電話番号を明記(匿名希望の場合は、その旨も明記)
- あて先 〒601-8411 京都市南区西九条北ノ内町11 PHP研究所内 武士道協会事務局 読者投稿係
- FAX、電子メールでの応募も受け付けます。なお、原稿は返却できません。また、内容を損なわない範囲で修正させていただく場合もありますので、ご了承ください。

### 編集後記

広報誌「武士道」第2号をお届けさせていただきます。

創刊号、第2号と、まだまだ、協会からの一方通行の情報提供誌の域はできませんが、創刊号では許和洋様、第2号では岡本和徳様、竹下健一様からと、会員様からのご意見を頂戴することが出来ました。今後更に、会員様と協会、会員様同士の交流誌としての役割を果たしていきたいと願っております。

11月の協会のシンポジウムで、安岡正泰理事が、安岡正篤先生の言葉として、「二灯照燭、万灯照国。一つの灯火を掲げて一隅を照らす。そうした誠心誠意の歩みを続けると、いつか必ず共鳴する人が現れてくる。一灯は二灯となり三灯となり、いつしか万灯となって国をほのかに照らすようになる。だからまず自分から始めなければいけない。」と話されました。今、私も武士道協会員にとって必要なことは、一人ひとり、まず一灯となり、万灯にしていくことだと強く思います。

私たちの実践の一灯で、この広報誌を埋め尽くせたら素晴らしい日本を築いていけるのではないのでしょうか。経験談、ご意見をどしどしお寄せください。お待ちいたしております。

武士道協会 事務局

### 武士道協会事務局

〒601-8411 京都市南区西九条北ノ内町11 PHP研究所内  
TEL(075)681-5514 FAX(075)682-3565  
URL: <http://www.bushido.or.jp/> E-mail:[info@bushido.or.jp](mailto:info@bushido.or.jp)

特定非営利活動法人 武士道協会

- 武士道第2号
- 平成20年12月1日発行
- 季刊